

坂井隆・平岩俊司著 『独裁国家・北朝鮮の実像 核・ミサイル・金正恩体制』

朝日新聞出版, 2017年

本書は二人の北朝鮮専門家による対談を構成・整理して一冊の本としてまとめたものだ。一般向けに編まれた本とはいえ本文だけで340頁超のボリュームがある。また話し言葉の平易な表現で記述されているものの、北朝鮮について「政治・外交・安全保障・経済・インテリジェンス」など極めて広範な分野をカバーし、多岐にわたる議論を行っている。

また編集者の意図も正にそこにあるのだろうが、紙上では〈予定調和〉を目指すことなく研究者同士の意見のぶつかり合いが展開され、無理に二人の認識がすり合わされるということもないまま進行する。実際の対談現場にはいたのだろうか司会者も一切登場することがない。この対談は両者が〈謙虚〉に自身の〈仮説〉を基にして、〈北朝鮮の実像〉に迫る語りを尽くすための舞台であり、その場に同席していた箱田哲也氏の言葉を借りれば〈プロフェッショナルの流儀〉を具現化したものなのだという。ゆえにか、双方の意見が特に結論を導きだすことなく開陳されていき、適切なたとえではないかもしれないが、ジャブの応酬が延々と続くような印象を受ける。

全体的な読後感を結論から言うと、前提として読者の頭の中である程度の北朝鮮像が学問的な分析の枠組として出来上がっていなければ、話についていくのが難しいのではないかと思った。先にジャブの応酬という表現を使ったが、〈解答〉を求めてこの本を手にした読者はむしろ迷いを抱くかもしれない。個々の議論において、結論としてどうすべきかといったことには踏み込まないため、二人の話が大きな話の前提となる仮説のピースのひとつかけらなのだということが分からないと、読

んでいて迷子になるだろう。

この点で一般概説書として見ると内容の難易度が高めであり、また学術書のように一つのテーマを深く掘り下げるという形式でもないため、学会誌向けの書評としてどのように紹介するのがよいのか悩んだ次第である。

評者の力量ではとてもカバーしきれない領域まで議論が及ぶため、読んでいるとしばしば惹き込まれるように二人の意見を傾聴してしまい、圧倒的な知の洪水に溺れつつも評者の中立性に立ち返るべく苦勞した。ただしこれは研究者が普段は明かすことのない、その手の内まで曝け出しているのを目の当たりにしたような感覚に陥る愉しみでもある。反面、碩学の二人ですらこのように悩みつつ思索を深めているのかと、自分の浅はかさを恥じることしきりだった。

また、本書の対談企画は北朝鮮研究者から見ると夢のコラボレーションの実現でもあることを指摘しておきたい。南山大学教授であり、本学会の前会長でもある平岩俊司氏については日本の韓国・朝鮮研究を牽引する一人者として、あえての説明は不要であろう。一方の坂井隆氏については、法務省公安調査官という実務界に身を置きつつ現役時代より『北朝鮮ハンドブック』（講談社、1997年）、『資料北朝鮮研究Ⅰ 政治・思想』（慶應義塾大学出版会、1998年）などに優れた論考や解説を寄稿しておられる。また北朝鮮政治制度について多少専門的に学習した者なら、非売品ながら『朝鮮労働党の歴史的研究』（法務総合研究所、1987年）という名著を手にしたことがあろう。坂井氏は一般には余り露出されてこられなかったものの研究業績は蓄積されており、北朝鮮研究者の

間では以前より定評がある。今回の対談企画に当たって平岩氏から真っ先にその候補として名前が挙がったというのも納得がいく話だ。

その坂井氏と平岩氏が、現在の北朝鮮をめぐる様々な問題をどう認識し、分析しているのか。本書は以下のような第1章から第6章までで構成され、巻末資料として新旧「10大原則」の対照表、そして朝鮮労働党の党規約抜粋、その他に党機構図や国家機関の関係図などが収録されている。

- 第1章 核・ミサイル開発の実態——北朝鮮の真の目的は何か
- 第2章 「瀬戸際外交」の行方——日本、韓国、中国、アメリカ、ロシアの対応
- 第3章 日本のインテリジェンス——北朝鮮分析の方法と情勢認識
- 第4章 プロの情報分析から見ること——国内政治・市場経済・党大会
- 第5章 金日成、金正日、金正恩——「世襲王朝」3代の変化
- 第6章 南北関係と日朝関係のこれから——「了解不能な存在」とどう向き合うのか

★巻末資料

- ・金正日から金正恩への権力承継期略年表
- ・「首領制」の権力構造概念図と解説
- ・朝鮮労働党の新旧「10大原則」比較
- ・朝鮮労働党機構図
- ・北朝鮮国家機関関係図
- ・北朝鮮の主な国家機関の概要 1: 中央機関
- ・北朝鮮の主な国家機関の概要 2: 地方機関
- ・「国家経済発展5カ年戦略」の骨子
- ・朝鮮労働党規約（抜粋）
- ・北朝鮮と世界の動きの略年表

議論の一つ一つは、ここで評者が要約していくよりも、実際に手に取って二人の息遣いを感じつつ読んでいただいた方が良いと思うが、個人的に印象に残った箇所を簡潔に紹介する。

第1章では北朝鮮の核・ミサイル脅威について論じつつ、核を持った北朝鮮というものをどう受け止めたらよいのかという点まで議論されている。また北朝鮮の認識する朝鮮半島の対立構図が図示

されており、関係国それぞれの思惑が異なることが分かりやすく説明されている。坂井氏は、「核つきの北朝鮮」というのは、実はそれほど怖いものではない(29頁)、「北朝鮮がいま一番嫌なのは、制裁されたり非難されたりすることよりも、無視されることでしょう(36頁)」、「いまの北朝鮮は、核を放棄せずにアメリカとの関係を構築したい(43頁)」といった点を指摘する。

第2章では核抑止論を前提にしつつ、核拡散の脅威などについて説明している。また北朝鮮の外交ロジックなども取り上げ、彼らなりの正当性もあるのだと指摘する。そして中国やソ連との歴史的な関係性も振り返って話が進む。ただ、100頁で平岩氏が中朝友好協力相互援助条約の契約更新はないと述べているのは誤りである。条文中に明記はされていないが、20年毎に更新していることを中国も認めている。

評者として一番興味を感じたのが、第3章と第4章である。坂井氏が「自分がどういう仮説に立って北朝鮮を分析しているのかということにあまりに無自覚であると、現実と分析に齟齬が生じたとき、「どこが間違っていたのか」をたどることもできず、修正する機会すら逃してしまう。だからやはり、自分たちはいくつかあるうちの仮説のどれかを使っているにすぎないということ、十分自覚する必要がありますね(119頁)」と述べているのは、正に〈プロフェッショナルの流儀〉なのではないかと思った点である。そして北朝鮮研究を進める中では避けて通りにくい、「アカデミズムにおける非公然情報の効用あるいは限界についてどう考えますか(122頁)」という問いを坂井氏が発しているのも注目に値する。具体的には脱北者情報の扱いをめぐる話題が展開するが、平岩氏はやや慎重な態度を示しながらも、既存のクレムリノロジーのような手法に対し「文献や北朝鮮メディアの言葉の使い方も変わってきたのではないかと思いますね(128頁)」と指摘している。そして「強盛大国」が「強盛国家」に言い換えられた事例を引き合いにし、あまり細かな部分のみに注目することは、どれほど意味があるのかという疑問を呈している。そして第4章では坂井氏により、軍の内部文書を分析した経験が語られる。

組織指導部の主導的地位については、脱北した幹部らを通じてこれまでも伝えられてきたことではあり目新しい指摘ではないのだが、党が軍内の党組織である総政治局を通じてしっかりと指導、監督している点を強調している。先軍政治と言っても、軍が全てをコントロールするわけではなく、あくまで首領を中心とする体制は揺らいでなかったという見解を示している。

第5章では坂井氏が、「北朝鮮については、恐怖政治で体制が維持されていると言われがちですが、既存指導部が住民から積極的に支持される要素もあって、その一つは民族的自負心を支えていることです」(264頁)とし、「歴史に由来するいわば「民族的コンプレックス」をいやすということの重要性は、どんなに強調しても強調しきれない」(同)と述べているのはまともを得た指摘だと感じた。我々日本人は北朝鮮の体制がなぜ崩壊せず、また民心を失ったりしないのかという疑問を抱きがちであるが、これに対して非常に明確な回答を提示したものだだろう。中国や韓国よりも北朝鮮がこの点では上手く処理したとして、アメリカと対等に渡り合うための核とミサイル開発という名分が、国内的にも説得力を持って受け入れられている所以だというのはすっきり納得のいく説明である。

最後の第6章では南北関係と日朝関係の展望が語られている。平岩氏は多くの情報を韓国にもたらしたという点で、太陽政策は肯定的に評価してよいとする。坂井氏は太陽政策について、「北朝鮮に対して、一見、融和的なように見えるけれど、ある意味、傲慢だった」(312頁)と指摘している。北朝鮮の体制そのものをどう見るかという視座が、韓国側に欠落していたのではないかというのが両

氏の共通した見解である。そして日朝関係について北朝鮮側は、第1章でも触れられているように米朝関係さえ改善すれば、日韓は自ずとそれについてくるという見通しを持っている可能性を指摘している。ただ日本として拉致問題については結局、「拉致、核・ミサイルの包括的解決」を目指すしかないという結論に行きつく。北朝鮮にとって拉致問題は核と違って体制の存続に直結する問題ではないため、相応の見返り次第ではこれを切り離しての交渉はできるかもしれない。ただそうだとすると、日本は国際社会との連携もあり、核・ミサイル問題の進展がない状態のまま日本だけが北朝鮮への制裁解除や経済協力に動くわけにはいかないという問題が生じる。また反対に核問題が進展したときに日本は国際的に応分の役割を果たすことが求められるが、拉致が置き去りにされたままだとそうした対応も難しくなるというジレンマがあるためだ。

以上がざっくりとした本書の内容と、評者が考えたことのまとめである。ただ内容的には、二人の議論のうちのほんの一部を切り取って紹介したに過ぎない。今回は熟読してから、安易に書評の依頼を引き受けたことを強く後悔した。これだけ多くの問題設定が盛り込まれている本を取り上げながら、紙幅の制限もあって、ごく一部しか中身について論じることができないのが誠に残念である。若輩の研究者としては業界の大先輩方の頭の中身を覗き込み、思考の回路の断片を垣間見てカンニングしてしまったような気持ちになり、北朝鮮をめぐる多くの問いについてまだまだ議論を詰めていくべき要素があるのだということを改めて再確認できた一冊である。

(堀田幸裕 霞山会研究員)